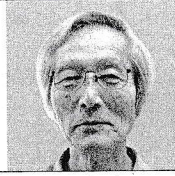


高校格差 教師の意識は

高校教師の意識調査を行った武内清・敬愛大学客員教授は、現在の高校間格差は生徒が勉強や受験、部活動や将来に関して意欲的かそうでないかという違いとして表れると指摘する。



武内 清

敬愛大学客員教授

対して、非進学校の教師は、反抗的で勉強に興味を示さない多くの生徒に對して厳しい生徒指導で臨んでいた。

しかし、その後の高校の受験競争の緩和、多様な政策、推薦・AO入学の導入、少子化の進行等々によって高校現場は様変わりしている。高校教育の様々な側面で見られた学校間格差は、現在も存在するのであろうか。

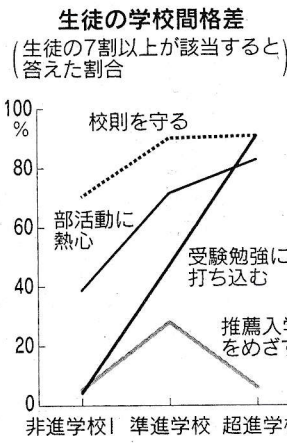
戦後、高校進学率が上昇する中で、学力(偏差値)による輪切り選抜が進み、高校間に格差がでた。調査は全国普通科350校の教師に依頼し、764人から回答を得た(回収率31.2%)。そのデータから考察してみよう。高校間格差の指標として、大学進学率と難関大進学率の割合をもとに、非進学校Ⅰ、同Ⅱ、

非進学校「無気力」に悩み

進進学校、進学校、超進学校の5群に分けた。校則を守らない生徒は、教員の属性でみると、非進学校で若干多い傾向があるが、非進学校でも7割の生徒は校則を守っている。かつてのように学校や教師に反抗する生徒は今や少数派。反抗作業を受けると「授業の予習・復習をする生徒」の予習・復習をする生徒の予習・復習が問題となっている。

生徒の特性でみると、超進学校には「熱心に授業を受けると「授業の予習・復習をする生徒」の予習・復習が問題となっている。超進学校には「熱心に授業を受けると「授業の予習・復習をする生徒」の予習・復習が問題となっている。

「海外への進路に興味を持つ生徒」「理工系の進路を選ぶ女子」は超進学校に多く、「経済的な理由で希望の進路に進めない生徒」「進路を決められない生徒」は非進学校に多い(グラフ)。「授業では指導案や講義ノートを作っている(6割)」「授業は指図案や講義ノートを作っている(6割)」「海外への進路に興味を持つ生徒」「理工系の進路を選ぶ女子」は超進学校に多く、「経済的な理由で希望の進路に進めない生徒」「進路を決められない生徒」は非進学校に多い(グラフ)。



校則守り 反抗少なく ■ 生徒の関心 寄り添って

で8割弱と多少多いが、超進学校(7割弱)と大きな差ではない。教師たちが授業で「とても大事」だと思っていことを聞いてみた。進学校では「大学受験に對した授業」が9割強を占めるのに対し、非進学校では「職業に結びついた知識や技能が得られる授業」が8割強という違いがあった。

「基礎的な力の付く授業」や「生徒が興味や関心を持てる授業」「アクティブ・ラーニング」に關しては顕著な差はない。どの学校の教師も大事と思っている。教師たちは、それぞれの学校の生徒の特質(生徒文化)に合わせた教育指導を工夫している。それは教師の生き残り戦略でもある。

現在、文部科学省主導の高校改革が進行中で、科目の編成や大学入試も変わろうとしている。一連の改革の動向や新学習指導要領の動向に關心を寄っているのは、超進学校の教師たちである。一方、それ以外の高校の教師は、現在の改革が実際の学校や生徒の表情に合っていないことに戸惑いを感じている。

調査からは、高校間の格差は現在も依然として存在するといえる。それは、生徒が勉強や受験、部活動や将来に関して意欲的かどうかという格差(違い)である。上位の進学校が実績や伝統を重んじ、生徒の資質や実力をさらに伸ばす教育努力をすることは当然である。国際競争力を伸ばすためにも卓越した教育は必要だからだ。

一方で、関心が勉強や受験以外に向いている生徒が多い学校も存在し、その生徒らの特質に寄り添うことも大事だ。総合的な知をほぐし、高校を魅力的なものにし、卒業後は地域への定着を進める実践も報告されている。外国籍や特別支援の子供たちも多く入学する学校も増えている。

高校教師たちは格差を越えて、それぞれの地域の学校の伝統や生徒の特質に応じた教育指導、進路指導をきめ細かく行うことが今求められている。